

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 マガレイ

学名 *Pleuronectes herzensteini*

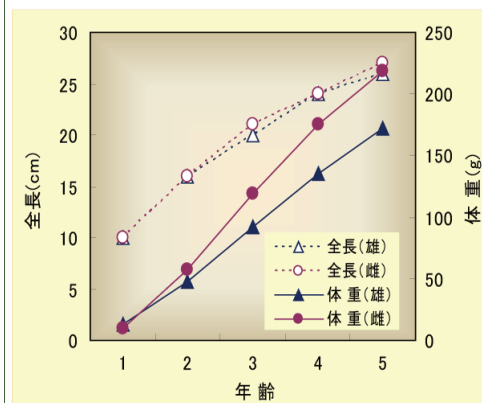
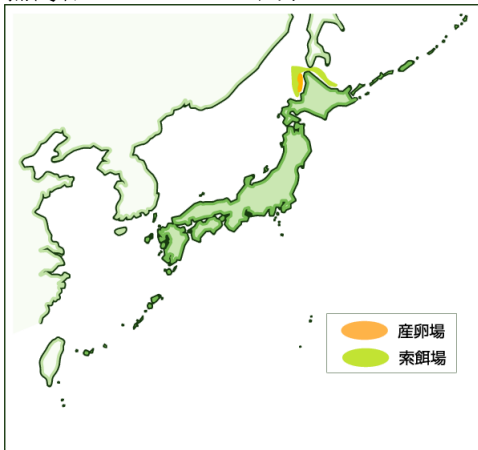
系群名 北海道北部系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄5歳、雌10歳以上
成熟開始年齢: 雄1歳、雌2歳
産卵期・産卵場: 4～6月、苫前沖～利尻・礼文島周辺海域
索餌期・索餌場: 北海道の日本海側～オホーツク海側の沿岸
食性: 仔魚はカイアシ類、未成魚と成魚はゴカイ類、二枚貝類、ヨコエビ類、クモヒトデ類
捕食者: 不明

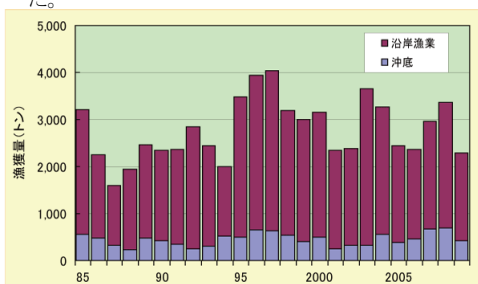


漁業の特徴

マガレイ北海道北部系群は、主に刺し網漁業によって漁獲されており、日本海における主漁期は10～6月で、オホーツク海における主漁期は5～12月である。また、日本海では主に成魚が漁獲されるのに対し、オホーツク海では主に未成魚が漁獲されるが、漁獲量は日本海で多い。

漁獲の動向

沖合底びき網漁業(沖底)の漁獲量は、1983年以降1,000トン未満で推移しており、2009年は429トンであった。沿岸漁業の漁獲量は、1980年代後半以降増加傾向を示したが、1998年以降は1,800～3,300トンの間で推移しており、2009年は1,852トンであった。沖底と沿岸漁業を合わせた漁獲量は、1980年代後半以降概ね2,000～3,000トン台で推移しており、その中で、豊度の高い年級群が発生した後に増加する傾向がある。2009年の漁獲量は2,281トンであった。

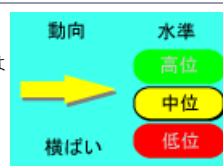


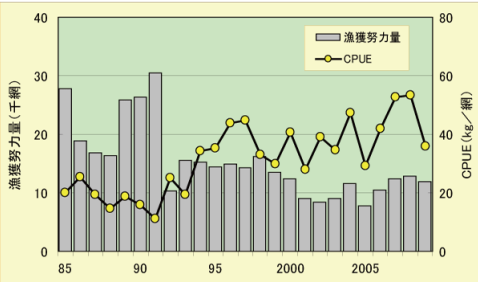
資源評価法

CPUEは沖底についてのみ算出可能であるが、沖底の漁獲量は全漁獲量の2割程度であることや、沖底と沿岸漁業では漁場や漁獲物の体長組成などに違いが見られることから、沖底のCPUEを本系群全体の資源量の指標とすることは妥当ではないと推察されるため、漁獲量を基に資源状態を判断した。なお、稚内水産試験場(稚内水試)は、本系群についてコホート解析による資源量推定や幼魚調査を実施しているため、それらの結果も参考とした。

資源状態

過去25年間(1985～2009年)における漁獲量の平均値を50とすると、2009年の漁獲量は41に相当するため、資源水準は中位と判断した(低位:～30、中位:30～70、高位:70～)。また、過去5年間(2005～2009年)における漁獲量の変化パターンから、資源動向は横ばいと判断した。なお、稚内水試が実施している幼魚調査や資源量推定結果によると、1993、1996、2000、2004および2007年級群の豊度が高いと考えられる。





管理方策

資源状態は中位で横ばいと判断されるとともに、1993年級群以降、数年おきに豊度の高い年級群が発生しており、近年は良い加入状況下にあると考えられる。よって、現状の漁獲圧を継続しても、資源水準が低位になる可能性は低いと推測されるため、現状の漁獲圧を継続することにより、現在の資源水準(中位)以上を維持することを管理目標とした。ABC算定規則2-2-(2)に基づき、過去5年間(2005～2009年)の平均漁獲量をABClimitとし、ABClimit×0.8をABCtargetとした。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	27百トン	Cave5-yr	—	—
ABCtarget	22百トン	0.8Cave5-yr	—	—

- 資源評価のまとめ**
- 漁獲量を基に資源状態を判断
 - 資源水準は中位、動向は横ばい
 - 数年おきに豊度の高い年級群が発生

- 管理方策のまとめ**
- 近年は良い加入状況下にある
 - 現状の漁獲圧を継続しても、資源水準が低位になる可能性は低い
 - 現状の漁獲圧を継続することにより、現在の資源水準以上を維持することを目標にABCを算定

執筆者: 船本鉄一郎・山下夕帆

資源評価は毎年更新されます。